

世間との整合・不整合事態における「私」による 世間との関係再構築過程

The process of rebuilding a relationship with “seken” by “I” in consistent and inconsistent situations with “seken”

風間 文明¹⁾

KAZAMA Fumiaki

下斗米 淳²⁾

SHIMOTOMAI Atsushi

角尾 美奈³⁾

TSUNOO Mina

飛田 操⁴⁾

Hida Misao

要 旨

本研究では、他者を代弁者として世間との一致が自己に伝達された整合事態と、世間との不一致が自己に伝達された不整合事態における、「私」による世間との関係再構築過程のモデルの検証を行った。このモデルでは、世間との関係再構築過程を（1）整合、不整合事態の評価、（2）世間との関係調整、（3）世間との関係再構築の3段階から構成されると仮定している。302名の大学生を対象に質問紙調査を実施した。主な結果として、（a）3段階モデルが概ね妥当であることが確認され、（b）整合事態においては、「私」は世間と一致しただけでは満足せず自らの言動を世間に発信し自分自身が世間を形成しようとする、（c）不整合事態においては、「私」は自分と一致する別の世間を探すか、または世間に同調することで適応を図るが、世間への同調は一方で自分についての確信を低下させることで世間への適応を阻害することもあることが示された。

目 的

「世間」については、これまでに社会科学的な領域において“個人個人を結ぶ関係の環（阿部、

1995, p.16)”、“自分が属しているウチの集団と属していないソトの集団の中間帯（井上, 2007, p.124)”などと捉えられてきた。特に井上（2007）は、“行為主体である個人の側から見れば、我が

¹⁾ 十文字学園女子大学教育人文学部 心理学科
Department of Psychology, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

²⁾ 専修大学人間科学部
School of Human Sciences, Senshu University

³⁾ 学習院女子大学国際文化交流学部
The Faculty of International Cultural Relations, Gakushuin Women's College

⁴⁾ 福島大学人間発達文化学類
The Faculty of Human Development and Culture, Fukushima University

国の人々に特有な一種の「準拠集団」である (p.98)”として、世間の働きに関して言及している。準拠集団とは、“個人の意見、態度、判断、行動などの基準となる準拠枠を提供する集団” (Merton, 1957 森・森・金沢・中島訳, 1961) を意味する。Shimotomai, Tsunoo, Kazama, & Hida (2017) によると、世間は英語における“the world/community”とは異なり、“境界がなく実体として他と区別できる特質も持たず、しかし準拠枠として日本人の諸反応を規定する内在化された表象”と定義されている。世間は、個人の態度や行動などに影響を与えるという点で、機能としては準拠集団と同等であるが、集団としての実体を持つわけではなく、個人内に形成される表象と見るべきであろう。中村 (2011) も、世間は常に存在するわけではないが、何かのきっかけで個人に対して顕現化してその個人の行動や考え方に影響を与える規範として機能すると考え、準拠集団としての機能を認めながら、実体がないという点で準拠集団よりも準拠枠という概念を用いることを提案している。これらの議論を踏まえ本研究では Shimotomai *et al.* (2017) の定義に従うこととする。人の心理や行動に常日頃から影響を及ぼしていると考えられる世間だが、その働きに関する心理学的研究は少ない。例えば三隅・木下 (1992) は、世間を人間関係のネットワークとしてとらえ、未知の2人の人物が結合するのに必要な対人的連鎖の数を検討しているが、世間そのものの働きや世間と個人との関係を直接検討したものではない。

中村 (2011) は、世間が個人の行動や考え方に影響を与える過程について以下のモデルを提唱した。まず、ある他者が代弁者となって世間の考えや意向を個人に伝達する。それを聞いた個人内では、自己が世間の反応を、世間に適応しようとする主体としての「私」に伝播する。「私」は自己を通して様々な様態で世間との関係を調整し適応を図ろうとする、というモデルである。自分の機能を自己と「私」とに区別する捉え方は、古く

James (1890) などに由来する。中村 (2011) のモデルでも自己の二重構造の考え方を踏襲し、個人の主体的役割を担当している機能の部分を「私」、その働きを受け取って世間と接触し「私」の代理人的役割を担当している部分を自己と呼んで区別している。自己は「私」の代理人であり「私」は自己の管理者というわけである。このモデルは、「私」と世間がそれぞれ自己と他者を仲介役として、心理的・社会的に交流することを示したものと見える。

Shimotomai *et al.* (2017) は、中村 (2011) のモデル並びに中村 (1990) による自己過程のモデルに基づいて、世間が個人に影響を与える過程の中で自己がどのような機能を果たしているかを実証的に検討している。Shimotomai *et al.* (2017) の提唱するモデルでは、自己を「私」の代理人と考え、世間との関わりの中で自己が果たす機能について、世間に注目する第1段階、世間を理解する第2段階、世間を評価する第3段階、その評価内容に基づき世間との関係を自己が「私」にフィードバックする第4段階から成る一連の過程と捉えている。このモデルは、世間に対する自己機能を明らかにしたものであるが、こうした自己機能はどのようにして活性化するのだろうか。言い換えると、世間の代弁者である他者によって世間の意向が伝達され、自己がそれに注目するのはどのようなときであろうか。

準拠集団の機能を持つ世間は、規範や常識や特定の立場のサンプルとして人々に受けとられ、その規範や立場に基づいて個人の言動などを賞賛したり批判したり、さらに仲間として受け入れたり排斥したりという働きかけをする (中村, 2011)。中村 (2011) のモデルに基づけば、この働きかけを実際に担うのは世間の代弁者である他者ということになる。そうだとすると、人々が他者から賛同されたり否定されたりする事態こそが、背後にある世間の意向が伝達される事態だとみなすことができ、そのとき世間に対する自己の注目が高まるのだと考えられる。よって本研究で

は、こうした個人の言動が他者から賛同されたり同意されたりする事態と、逆に非難されたり否定されたりする事態に着目し、以後、それぞれ整合事態、不整合事態と呼ぶことにする。

整合事態、不整合事態においては、世間の代理人である他者から伝えられた世間の意向を「私」の代理人である自己が覚知して「私」に伝えることになるが、その際伝えられる内容は、世間との関わりを自己がどのように評価したかという内容であろう。世間との関わりとしてまず考えられるのは、自分が世間と合致しているか、逸脱しているかという評価であり、これらの評価を本研究ではそれぞれ「社会的包含」、「社会的孤立」と呼ぶ。社会的包含は、「私」が世間の規準に準拠し、世間の一員としてその中に含まれているという評価を意味し、社会的孤立は、逆に世間の基準から逸脱し、結果的に世間から孤立しているという評価を意味する。Schutz (1958) は、対人関係を方向付ける欲求として包含、統制、情愛の3つの基本的対人欲求を仮定し、対人関係の形成のためにまずは包含か否かが問題とされることを主張している。包含は個人と集団や、一对多の関係を意味していることから、世間との関わりにおいても、社会的包含か社会的孤立かの評価はまず重要だと推測される。さらに世間との関わりに関してもう一つ考えられる評価は、目の前の他者によって代弁されている世間を準拠集団とみなさないというものだと思われる。中村 (2011) は、所属集団からの集団圧に屈せず非同調を貫く成員に関して、それができる理由として、他に準拠集団を持っているからであると指摘している。個人にとっての世間は1つとは限らず、むしろ複数の世間と関わり合っているとみなすことができ、その内のどの世間に準拠するかは、状況に応じて選択できるはずである。つまり、元々準拠集団としていたある世間の規範をどうしても受け入れられない場合に、別により準拠できる世間を探すということが可能である。そうだとすると、ある1つの世間との関わりを社会的包含か社会的孤立かと評価する

だけでなく、そもそも準拠すべき世間なのかどうかの評価が行われると考えるのも自然であろう。本研究では、整合事態、不整合事態に対して、その世間を準拠集団とみなさなくてよいと自己が評価することを「脱準拠」と呼ぶことにする。以上、整合事態、不整合事態に対する世間との関わり方の評価として社会的包含、社会的孤立、脱準拠の3つの評価を仮定する。

阿部 (1995) によれば、日本人は世間から相手にされなくなることを恐れ、世間から排除されないように言動に気をつけていて、ときとして世間のために死に追いやられる人もいるという。極端な場合とはいえ、もしも世間が私たちの生活や生存を脅かすようなことがあるとすれば、できるだけ世間と折り合いを付けて上手くやっていくことが望ましく、安心して生きていくためには世間に適応していく必要がある。Schutz (1958) によれば、包含によって対人関係が形成された後には統制、情愛の欲求の位相がある。統制、情愛の欲求は、対人状況において相互にコントロールをし合い、互いに親しく満足のいく関係を確立しようとすることを意味する。このことから世間との関わりにおいても、社会的包含、社会的孤立、脱準拠といった世間と「私」との関係についての評価が自己から「私」に伝達されると、次に生じるのは、その評価に応じて「私」が代理人である自己や代弁者である他者を介して世間との関係を調整しようとする関係調整と、最終的に世間と満足のいく関係を再構築する段階だと考えられる。

世間との関係調整段階では、まず整合事態、不整合事態に対して、「私」の振る舞いや考えを世間の規準に合わせて変容させるか、逆に「私」の振る舞いや考え方を世間に理解してもらおうと主張することが考えられる。Piaget, J. は、生活体が環境にはたらきかけて、これを変化させ内にとりいれることを同化、生活体が事物に対して自らを変化させることを調節と呼んで、生活体の外界への適応行動を説明した (坂元, 1965)。本研究では、同化と調節の概念を援用し、世間に対して

「私」の考えに合わせるように理解を求めるような世間との関係調整の方略を「同化」、「私」の側を世間に合わせて変容させる調整の方略を「調節」と呼ぶことにする。例えば不整合事態は、世間と「私」との齟齬が顕現化した事態と見なすことができるため、世間に適応するためには関係調整の方略として、「私」を世間に合わせる調節が起りやすくなることが推測される。この関係調整の段階では、同化、調節の他に、世間との一致、不一致の情報に基づいて、「自分はこれでよいのだ」という確証感を高めて、積極的な関係調整を図らないということもあり得るだろう。その状態を「自己確証」とする。これら調節、同化、自己確証を、世間との関わりの評価に続く第2段階である世間との関係調整段階だと仮定する。

世間との関係調整を経て次に生じるのが、世間との関係を再構築する段階である。ここでは自尊感情を世間に適応した状態の指標とする。他者との関係性において自尊感情は、自分が排斥される危険性を警告する対人的モニターの機能を果たすことが指摘されている (Leary & Baumeister, 2000)。つまり自尊感情が高く維持されていることは自分を取り巻く人間関係に受容されていると見なすことが出来る。世間の意向は代弁者である他者によって伝えられるものだから、他者との関係性を広く世間との関わりととらえることができよう。このことから本研究では、自尊感情の高ま

りをもって世間への適応水準の指標とみなすことにし、その状態を「自尊感情醸成」と呼ぶことにする。しかしながら、この関係再構築の段階では前段階で世間との関係調整が上手くいかない場合や、既に整合事態でそれ以上に適応を図ろうとしない場合も考えられる。そのような場合には、世間を無視すべき対象と見なして世間の基準と一致させることを諦めたり、より自分と整合する別の世間を求めるといった関係再構築のやり方もあり得る。本研究では、こうした再構築された状態の内、前者を「放置」、後者を「世間探求」とする。放置は、整合、不整合の意向を伝達してきた世間を最終的に無視することを意味し、世間探求は、眼前の世間ではなく準拠先となり得る別の世間を積極的に探そうとすることを意味する。

本研究でのモデルを図1に示す。「私」が、準拠集団としての世間の基準と整合したり不整合だったときに、世間は他者を代弁者としてその意向を自己に伝える。世間の意向を汲み取った自己は、第1段階として世間との整合・不整合から世間との関係について、社会的包含か社会的孤立か脱準拠かの評価を行い、それを「私」に伝達する。自己から伝えられた世間との関係評価に応じて、「私」は世間との関係を調整し、世間に対して適応しようと試みる。その際、まず第2段階の関係調整として調節、同化、自己確証が生じ、その結果、第3段階の関係再構築として自尊感情

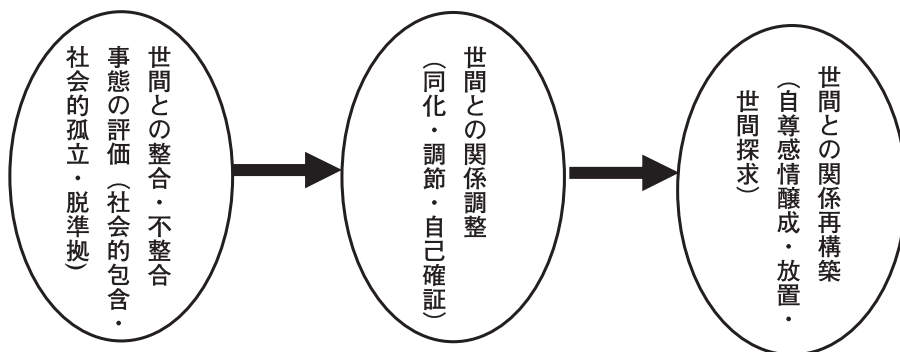


図1 「私」による整合・不整合事態における世間との関係再構築モデル

醸成、放置、世間探求が生じる。本研究では、こうした、「私」による世間との関係再構築過程について実証的に検証する。

その際に、整合事態と不整合事態では世間との関係再構築の過程が異なることと、同じ段階内つまり関係調整の3つの方略間、関係再構築の3つの状態間にも影響関係が存在することを仮定する。まず整合事態と不整合事態は、それぞれ自身の言動が他者から賛同されたり同意されたりする、「私」にとってポジティブなフィードバックを他者から受ける事態と、自身の言動が他者から非難されたり否定されたりする、「私」にとってネガティブなフィードバックを他者から受ける事態である。世間との一致が確認できた整合事態よりも不一致が明らかになった不整合事態の方がより積極的な関係調整、再構築をして世間への適応を図る必要が生じることが予想される。このことから両事態での関係再構築過程を異なる過程であると考え別々に検討を加える。同じ段階内の方略、状態の関係については、例えば同化と調節、自己確証は排他的で独立な方略とは考えにくく、むしろ同化と調節を同時に行いながら結果として自己確証を高めるといった段階内での影響過程も生じると想定できる。このことから、3段階の過程と合わせて関係調整、関係再構築段階内での影響関係も合わせて検討する。

以上のことから、本研究では図1に示した「私」による世間との関係再構築過程のモデルに基づき、整合事態、不整合事態ごとに、「私」が世間との関係をどのように調整、再構築し世間への適応を図っていくかについて明らかにすることを目的とする。整合事態、不整合事態を準拠集団としての世間が個人に影響を及ぼす事態だとみれば、それに対する個人の反応を描いたこのモデルに基づいて、個人が単に世間に準拠し同調するだけではなく、積極的に世間との関わりを調整、再構築していく主体的な存在であることを示すことができると思われる。

方法

調査対象者

関東の私立大学3校の大学生302名（男性65名、女性237名）を調査対象者とした。平均年齢は19.6歳（ $SD = 2.9$ ）であった。

質問紙の構成

(1) 整合条件と不整合条件 整合事態として、自分の考えや行動について他の人から理解されたり支持されたと感じた整合経験、不整合事態として、他の人から反対されたり、否定されたりした不整合経験のいずれかを想起してもらい条件を設定した。前者を整合条件、後者を不整合条件とし、調査対象者を無作為にいずれかの条件に割り振った。

整合条件では、「自分の考えや行動について、実在の人から賛成されたり、理解されたとか支持されたと感じた経験、あるいは直接知らない人や架空の人物の考えや行動を見て、自分の考えや行動が支持されたような気持ちになった経験」を想起してもらい、その経験について、具体的な内容を自由に記述してもらった。

不整合条件では、「自分の考えや行動について、実在の人から反対されたり、批判的に見られたとか否定されたと感じた経験、あるいは直接知らない人や架空の人物の考えや行動を見て、自分の考えや行動を否定されたような気持ちになった経験」を想起してもらい、その経験について整合条件と同様に内容を記述してもらった。

(2) 事態の評価 世間との関係再構築過程の第1段階として、整合経験と不整合経験をどのような事態であると評価したかについて、著者らが合議して作成した33項目から成る尺度（角尾・飛田・下斗米・風間、2010）に評定を求めた。尺度は、社会的包含、社会的孤立、脱準拠の3つの因子から構成され、各因子につき11項目ずつを設定した。回答形式は、「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法とし

た。項目を表1に示す。

(3) **世間との関係調整** 世間との関係再構築過程の第2段階である世間との関係調整を測定するために、著者らの合議によって作成した12項目を使用した(角尾ほか, 2010; 風間・下斗米・飛田・角尾, 2010)。これらは、同化、調節、自己確証の3つの因子から構成されるよう設定した。整合、不整合経験の結果、どうしたか(どう感じたか)について、各項目に「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。項目を表2に示す。

(4) **世間との関係再構築** 世間との関係再構築過程の第3段階である再構築の様態である自尊心醸成、放置、世間探求を測定するために、角尾ほか(2010)、風間ほか(2010)に基づき著者らが設定した12項目を使用した。整合、不整合経験の結果、どうしたか(どう感じたか)について、各項目に「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。項目を表3に示す。

(5) **世間代弁性** 整合経験、不整合経験をしたときに、相手の人物が世間を代弁していると認知したかどうか(世間代弁性認知)を問うた。質問項目は、「その人(たち)の考えや行動を知って、世間の存在を意識した」、「その人(たち)の考えは、世間一般とは違って特別だと思った(逆転項目)」、「その人(たち)の考えや行動は世間一般の典型的なものだと思った」、「その人(たち)の背後に、世間を感じさせられた」、「その人(たち)の考えや行動が世の中の一般的なものに近いと思った」、「その人(たち)の考えや行動は、世間のそれを代弁していると思えた」の6項目で、それぞれ「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。

(6) **操作チェック：世間との整合性** 整合経験、不整合経験の想起を教示文によって操作したが、その操作チェックのために世間との整合性の評価について問うた。質問項目は、「自分と世間の意見は似ていると考えた」、「自分の意見は世間

一般の考えとは違うのだと考えた(逆転項目)」、「世間と自分との間にズレがあると認識した(逆転項目)」、「自分と世間とは整合していると考えた」、「自分は世の中の一員であると考えた」、「自分は世間の一員であると認識した」の6項目で、それぞれ「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。

他に、経験した整合、不整合事態の重要性¹⁾、整合、不整合経験の相手との準拠集団成員性、同様の事態で他の人物がどのような言動をするかの予測についての質問にも回答を求めたが、本研究の分析では使用しないため、詳細を割愛する。

以上の質問項目に、調査対象者の性別、年齢等を問うフェイスシートを付した。

調査時期と実施方法 2011年6月に授業時間の一部を用いて集団実施した。回答は無記名とした。

結 果

1) 操作チェック：世間との整合性

世間との整合性評価に関する6項目について一次元性を確認するために主成分分析を行った。第2主成分に負荷量の高かった1項目を削除して再度行ったところ、5項目とも第1主成分に.40以上の負荷量を示したため一次元性が確認された。 α 係数は $\alpha = .81$ と十分に高い値が得られた。5項目の評定平均値を算出して世間との整合性評価の尺度得点とした。

整合経験と不整合経験の操作が妥当であったことを確認するため、整合条件、不整合条件ごとに世間との整合性評価の平均値を算出したところ、整合条件は $M = 4.15$ ($SD = 1.12$)、不整合条件は $M = 3.68$ ($SD = 1.04$)であった。t検定を行ったところ、条件間に有意な差がみられた($t(298) = 3.75, p < .001$)。よって不整合条件の方が整合条件に比べて、世間との整合性を低く評価していることが示され、教示文による操作が妥当であったことが確認された。

2) 分析に用いる変数の尺度得点化

(1) 事態評価の因子構造

事態の評価33項目について最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。いずれの因子にも負荷量の低い項目、複数の因子に負荷量の高い項目7項目を削除し、残りの26項目について再度因子分析を行った。結果を表1に示す。第1因子は「社会的包含」、第2因子は「社会的孤立」、第3因子は「脱準拠」と、あらかじめ想定された3因子に相当する因子が抽出された。各因子の α 係数を算出したところ、社会的包含が $\alpha = .96$ 、社会的孤立が $\alpha = .93$ 、脱準拠が $\alpha = .88$ と十分高い値が確認されたため、各因子に含まれる項目の評定平均値を算出し、尺度得点とした。

(2) 世間との関係調整の因子構造

世間との関係調整12項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。結果を表2に示す。第1因子は「自己確証」、第2因子は「同化」、第3因子は「調節」と、あらかじめ想定された3因子に該当する因子が抽出された。各因子の α 係数を算出したところ、自己確証が $\alpha = .74$ 、同化が $\alpha = .78$ 、調節が $\alpha = .68$ であった。調節については「その人(たち)の意見に従わずに自分の考えや行動を優先させた(逆転項目)」を除外すると $\alpha = .77$ であったことから調節のみこの項目を除外して各因子に含まれる項目の評定平均値を算出し、尺度得点とした。

(3) 世間との関係再構築の因子構造

世間との関係再構築12項目について、最尤法、

表1 事態評価の因子分析結果(最尤法、プロマックス回転)

	I 社会的包含	II 社会的孤立	III 脱準拠
自分はその人(たち)の仲間であると思った	.962	.013	.087
自分はその人(たち)と同じグループの一員だと感じた	.901	.073	.029
その人(たち)の中に自分の居場所があると感じた	.883	.012	-.028
自分はその人(たち)に対して親しみをもっていることに気づいた	.878	.033	.008
自分はその人(たち)に対して好意を抱いていることを意識した	.831	.039	.057
自分が所属するのはその人(たち)のところでよいのだと感じた	.819	-.002	-.050
その人(たち)との間に一体感を感じた	.818	-.036	-.030
自分はその人(たち)のことを受け入れていると感じた	.810	-.027	-.052
その人(たち)から自分のことを受け入れられていると感じた	.807	-.118	.099
自分がひとりぼっちであるように感じた	.100	.887	-.109
自分はその人(たち)から疎外されているように思った	.011	.871	-.104
自分はその人(たち)から孤立した存在だと感じた	.027	.816	.044
自分はその人(たち)から好かれていないと感じた	-.025	.771	-.090
その人(たち)から浮いている自分を意識した	.119	.765	.076
その人(たち)が自分に対して気持ちの上で距離を感じていると思った	-.021	.724	-.055
自分はその人(たち)に対して気持ちの上で距離を感じた	-.187	.708	.042
その人(たち)に理解されていないように感じた	-.104	.647	.172
自分はその人(たち)の仲間ではないように感じた	-.291	.626	.038
自分の考えや行動をその人(たち)に合わせる必要はないと思っていることに気づいた	-.004	-.009	.834
その人(たち)の考えや行動が自分と同じでも違っていても、どちらでもよいと思っていることに気づいた	.048	-.212	.768
自分の考えや行動がその人(たち)からはずれていてもかまわないと思っていることに気づいた	.067	.113	.767
その人(たち)の考えや行動によって、自分の考えや行動が左右されることはないと感じた	-.020	-.079	.703
自分の考えや行動が適切かどうかは、その人(たち)の考えや行動を手がかりにしくなくても判断できることに気づいた	.082	.062	.685
その人(たち)に自分の考えや行動を理解してもらえなくてもよいと感じた	-.158	.018	.640
自分の考えや行動を決めるときに、その人(たち)の考えや行動を参考にする必要はないと思った	-.145	.112	.618
自分の損得がその人(たち)の考えや行動によって影響されることはないと感じた	.119	-.038	.468
因子間相関			
I		-.669	-.407
II			.343

表2 世間との関係調整の因子分析

	I 自己確証	II 同化	III 調節
自分の考えや行動に自信がなくなった (R)	.847	.045	-.047
自分がわからなくなった (R)	.710	-.131	-.114
自分の考えや意見をその人 (たち) に理解してもらうことをあきらめた (R)	.575	-.051	.221
自分に迷いがなくなった	.498	.039	-.071
自分の考えや行動が正しかったと確信が持てた	.423	.275	-.109
自分の考えや行動の正当性をその人 (たち) に主張した	.120	.915	-.007
その人 (たち) に理解してもらえるように、自分の考えや行動を説明した	.108	.750	.152
その人 (たち) の考えを変えさせる努力をした	-.194	.541	-.008
その人 (たち) の考えや意見に合うように自分の考えや行動を変えようとした	-.094	-.009	.813
その人 (たち) の考えや行動を受け入れるように努めた	.049	.180	.723
自分の考えや行動をやめてその人 (たち) のいうことに合わせた	-.260	.041	.487
その人 (たち) の意見に従わずに自分の考えや行動を優先させた	.279	-.308	.479
因子間相関			
	I	-.217	-.408
	II		.111

表3 関係再構築の因子分析

	I 自尊感情醸成	II 放置	III 世間探求
自分が誇らしく思えた	.915	-.012	-.115
自尊心が高まった	.754	-.048	.156
自分が優れた者と思えた	.671	.021	-.007
その人 (たち) の意見や考えを聞き流した	.007	.816	-.075
その人 (たち) の意見や考えを無視した	.032	.758	-.070
しょせんその人 (たち) と自分は違うのだと思ってあきらめた	-.088	.683	.132
他に自分と同じ意見や考え、行動をする人を探した	.043	.051	.663
誰か他の人の意見や考えを知りたくなった	-.195	-.122	.652
自分を理解してくれる人が他にもっといるはずだと思った	.101	.207	.566
自分の考えや行動の内容について、他の人にも話した	.110	-.101	.555
因子間相関			
	I	-.056	.211
	II		.185

プロマックス回転による因子分析を行った。いずれの因子にも負荷量の低い項目2項目を削除した残りの10項目について再度因子分析を行った。結果を表3に示す。第1因子は「自尊感情醸成」、第2因子は「放置」、第3因子は「世間探求」と、あらかじめ想定された3因子に相当する因子が抽出された。各因子の α 係数を算出したところ、自尊感情醸成が $\alpha = .82$ 、放置が $\alpha = .78$ 、世間探求が $\alpha = .70$ と十分高い値が確認されたため、各因

子に含まれる項目の評定平均値を算出し、尺度得点とした。

整合条件、不整合条件別に事態の評価、世間との関係調整、世間との関係再構築の各因子について平均値を算出した結果を条件間の差の検定結果と合わせて表4に示す。整合・不整合事態の評価においては、整合条件の方が不整合条件よりも社会的包含だという評価が有意に高く ($t(285.2) = 13.1, p < .001$)、社会的孤立と脱準拠だという

表4 世間との関係再構築過程での各変数の平均値

	整合条件			不整合条件			自由度	t値
	平均	SD	N	平均	SD	N		
第1段階：整合・不整合事態の評価								
社会的包含	5.37	1.19	148	3.34	1.46	150	285.2	13.1 ***
社会的孤立	1.97	0.99	146	3.59	1.49	150	260.4	11.1 ***
脱準拠	3.31	1.10	147	4.23	1.30	150	289.0	6.6 ***
第2段階：世間との関係調整								
自己確証	5.09	1.05	149	3.87	1.12	150	297.0	9.7 ***
同化	3.55	1.26	149	3.70	1.36	149	296.0	1.0
調節	3.04	1.22	149	3.27	1.58	150	280.1	1.4
第3段階：世間との関係再構築								
自尊感情醸成	3.44	1.38	149	2.55	1.06	150	278.3	3.2 ***
放置	2.00	0.93	149	3.55	1.42	151	259.1	11.2 ***
世間探求	4.20	1.29	148	4.36	1.41	150	296.0	1.0

得点可能範囲は1～7 * $p < .05$, *** $p < .001$

評価が有意に低かった ($t(260.4) = 11.1$, $p < .001$; $t(289.0) = 6.6$, $p < .001$)。世間との関係調整では、整合条件の方が不整合条件よりも自己確証が有意に高かった ($t(297) = 9.7$, $p < .001$)。同化、調節については有意な差が見られなかった ($t(296) = 1.0$, ns ; $t(280.1) = 1.4$, ns)。世間との関係再構築では、不整合条件の方が整合条件よりも自尊感情醸成が有意に低く ($t(278.3) = 3.2$, $p < .001$)、整合条件の方が不整合条件よりも放置が有意に起こりにくい ($t(259.1) = 11.2$, $p < .001$) ことが示された。世間探求については有意な差が見られなかった ($t(296) = 1.0$, ns)。

3) 世間代弁性の得点化と世間代弁性による分析対象者の限定

世間代弁性認知に関する6項目について一次元性を確認するために主成分分析を行った。第2主成分に負荷量の高かった2項目を削除して再度行ったところ、4項目とも第1主成分に.40以上の負荷量を示したため一次元性が確認された。 α 係数は $\alpha = .87$ と十分に高い値が得られた。4項目の平均評定値を世間代弁性認知の尺度得点とし

た。本研究では、整合、不整合経験を、世間の代弁者が世間の意向を個人に伝える事態として考えている。それに照らすと、整合、不整合経験に対して調査対象者が世間代弁性を認知していることが必要になる。そこで世間代弁性の中央値3.75を基準として、それを上回る値を示した調査対象者を、整合、不整合経験の相手を世間の代弁者と認知した者とみなして、以降の分析対象とすることにした。人数は145名（整合条件67名、不整合条件78名）であった。整合条件、不整合条件ごとに世間代弁性の平均値を算出したところ、整合条件は $M = 3.58$ ($SD = 1.32$)、不整合条件は $M = 3.87$ ($SD = 1.50$)であった。t検定を行ったところ、条件間の差は有意な傾向であった ($t(299) = 1.79$, $p < .10$)。よって不整合条件の方が整合条件に比べて、その相手が世間を代弁していると認知されていることが示された。

4) 整合・不整合経験の評価が世間との関係調整、適応様態に及ぼす影響

整合経験、不整合経験をどのような事態と評価したかによって、世間との関係を調整し、世間との関係再構築を図る過程がどのように異なるかを

明らかにするために、事態評価の3因子である社会的包含、社会的孤立、脱準拠を第1水準、世間との関係調整の3因子である自己確証、同化、調節を第2水準、世間との関係再構築の3因子である自尊感情醸成、放置、世間探求を第3水準に設定した共分散構造モデルによるパス解析を行った。整合条件では、図2に示すパス図が得られた。適合度は、 $CMIN=15.20$, $df=21$, $p=.81$, $GFI=.95$, $AGFI=.90$, $RMSEA=.00$, $AIC=63.2$ と十分な値であった。不整合条件では、図3

に示すパス図が得られた。適合度は、 $CMIN=19.48$, $df=18$, $p=.36$, $GFI=.95$, $AGFI=.88$, $RMSEA=.03$, $AIC=73.48$ と概ね十分な値であった。図2、図3に示したとおり、整合条件と不整合条件の世間との関係再構築過程は異なるものであった。

整合条件(図2)においては、社会的包含と社会的孤立から同化への正の影響を介して世間探求、自尊感情醸成に正の影響がみられた。社会的

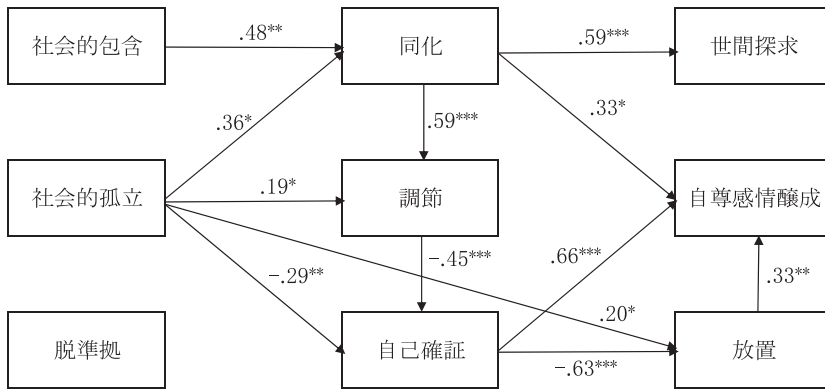


図2 整合条件における事態評価から世間との関係調整を経た世間との関係再構築へのパス図 (誤差項と第1水準内の相関係数は省略。有意なパスのみ記載) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

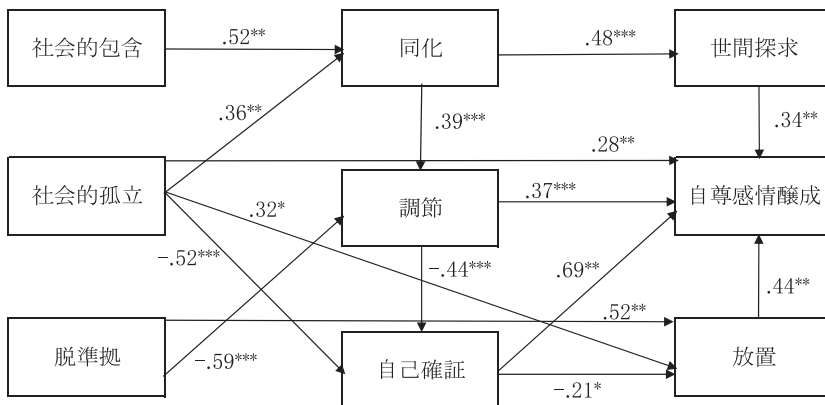


図3 不整合条件における事態評価から世間との関係調整を経た世間との関係再構築へのパス図 (誤差項と第1水準内の相関係数は省略。有意なパスのみ記載) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

孤立からは、同化を経て調節への正の影響、直接、調節への正の影響を介して、自己確証への負の影響から自尊感情醸成への正の影響、放置への負の影響が見られた。社会的孤立からは自己確証への負の影響もみられた。脱準拠からはいずれの変数への影響も見られなかった。他に、事態評価から関係再構築への直接のパスとして社会的孤立から放置への正の影響がみられた。また第3水準である世間との関係再構築の変数間においても、放置が自尊感情醸成を促進する正の影響がみられた。

不整合条件（図3）においては、社会的包含と社会的孤立から同化への正の影響を介して世間探求への正の影響、また同化から調節を介して自尊感情醸成へ至るパス、さらに調節から自己確証への負の影響を介して自尊感情醸成へ正の影響、放置への負の影響が見られた。社会的孤立からは、自己確証への負の影響を介して自尊感情醸成へ正の影響と放置への負の影響が見られた。脱準拠からは調節への負の影響を経て自尊感情醸成に至るパスと調節からさらに自己確証への負の影響を介して自尊感情醸成への正の影響と放置への負の影響が見られた。また事態評価から関係再構築への直接のパスとして社会的孤立から自尊感情醸成と放置への正の影響、脱準拠から放置への正の影響がみられた。また第3水準である世間との関係再構築の変数間においても、世間探求、放置からそれぞれ自尊感情醸成への正の影響がみられた。

整合条件、不整合条件ともに、概ね十分な適合度が得られたことから、事態の評価から世間との関係調整を経て世間との関係再構築に至る3水準のモデルの妥当性が確認できた。また想定したとおり、整合条件と不整合条件の過程が異なるものであること、同一水準内での変数間にも影響関係があることも確認できたが、整合条件と不整合条件における共通の過程の存在、そして第1水準から第3水準への直接の影響もみられた。

まず整合条件では、事態を社会的包含と評価しても社会的孤立と評価しても、世間との関係調整

の方略として同化が発動されやすく、同化によって自尊感情醸成が促進されるが、一方で世間探求も高まることが示された。また社会的孤立の評価によって、調節が高まり自己確証が低下して自尊感情醸成が阻害されるが、自己確証が低下すると放置することにより自尊感情醸成が促進されることも示された。

一方、不整合条件では、事態を社会的包含と評価しても社会的孤立と評価しても、世間との関係調整の方略としては同化が発動されやすく、その結果として世間探求が高まって自尊感情醸成も促進される経路と、調節が高まって自尊感情醸成の促進に繋がる経路があることが示された。調節をすると自己確証が低下し結果として自尊感情醸成も阻害されるが、放置することによって自尊感情醸成は促進されることも示された。社会的孤立と評価すると、関係調整の水準を経ずに直接、自尊感情醸成が促進され放置も高まることが示された。また脱準拠と評価した場合には調節は行われにくくなり、自己確証が高まり自尊感情醸成に至ることも示された。

全体として、整合条件と不整合条件では共通して、事態を社会的包含と評価しても社会的孤立と評価しても、どちらも関係調整の方略として同化がとられやすくそれによって調節も増加し、調節することで自己確証が低下して自尊感情の低下に繋がる過程が認められた。そして整合条件では同化によって、不整合条件では調節によって自尊感情が高められるといえる。また整合条件では第3水準での世間との関係再構築の状態が自尊感情醸成と世間探求であるのに対して、不整合条件では世間探求と放置からそれぞれ最終的に自尊感情醸成へと至ることも明らかとなった。

考 察

本研究では、「私」による世間との関係再構築過程に関して、世間との整合・不整合事態を経験したときに、まず事態の評価、それに応じた世間

との関係調整、最後に世間との関係再構築が生じるという3段階から成るモデルを仮定した(図1)。結果から、概ねモデルに沿った3段階の過程が示されたが、第1段階から第3段階への直接の影響もみられた。また整合事態と不整合事態では、その後の世間との関係調整、関係再構築過程において、共通した過程と事態特有の過程が確認された。以下に整合事態と不整合事態ごとに考察を行う。

整合事態における世間との関係再構築過程

世間の代弁者である他者から支持・賛同が得られた事態に対して、その世間の一員であると評価しても、逆にその世間から孤立していると評価した場合にも、自分の考えや意見をさらに主張することによって自尊感情を高めるだけではなく、さらに別の世間においても自分が支持されるかを探そうとする過程があることがわかった。Byrne & Nelson (1965) は態度の類似した相手に私たちが好意を感じやすいことを示したが、その理由として自分の考えの妥当性を確認できる合意的妥当化が外界を正確に解釈したいという動機に対して正の報酬となることが挙げられる(Byrne, 1971; Byrne, Nelson, & Reeves, 1966)。整合事態は自身の言動に対して世間から合意的妥当化を得られた事態なので、それにより自尊感情が高められ、結果として世間への適応感を高めることにつながるのだと思われる。自尊感情だけではなく世間探求も高まっていることから、1つの世間への適応だけでは「私」は満足できず、別の世間からの承認すなわち合意的妥当化を求めることで、より広範囲の世間に適応しようと動機付けられるのだと考えられる。一方で世間から孤立していると評価した場合には、自分の考えや意見の修正も生じ、自己確証が低下することで自尊感情の低下につながることもわかった。表4に示した平均値の低さからも、整合事態を社会的孤立と評価することは実際には少ないと思われるが、整合した世間について、自分はその世間の一員ではないと評価

することは、自分の考えや意見の妥当性をゆるがせて自尊感情を低下させるため、放置することによって自尊感情を維持するのだと考えられる。また、整合事態を脱準拠と評価した場合には、世間との関係調整の行動も関係再構築も発生しなかった。準拠集団とみなさない世間からの賛同・支持に対しては関係の調整などは不要なのだと考えられる。

不整合事態における世間との関係再構築過程

世間の代弁者である他者から否定、批判された事態に対しては、その世間の一員であると評価しても、逆にその世間から孤立していると評価した場合にも、自分の考えや意見をさらに主張する方向での関係調整が行われ、自分の考えや意見と合致する別の世間を探し、自尊感情を高めようとする。自分の考えや意見をさらに主張することによって、自分の意見を世間に合わせる方向での関係調整も行われるようになるが、それは自尊感情を高めると同時に、自己確証を低下させることで却って自尊感情を低下させて世間への適応を阻害する結果をもたらすという両価的な方略であるといえる。ここでの調節の方略は、世間に対する同調(Asch, 1951, 1956)に相当すると考えられる。集団から逸脱しないために意に反した同調を行うことは感情的負荷を伴う。例えば朴(2009)は高校生を対象に、仲間集団に適応するために仲間集団の誘いに同調することが逆にストレス経験を高める可能性を示している。自分の意見を修正して準拠集団としての世間の規範に同調することで安心感が得られたとしても、一方でそれを受容できないと感情的負荷が強まり、却って世間との関係を損なうことにもつながるのだと考えられる。また不整合事態を脱準拠と評価した場合には、関係調整の段階で自分の考えや意見を修正せず自己確証を高めて自尊感情が高まる過程が認められた。世間との不一致を経験した場合、世間に合わせずに自分の考えを主張し、より合致する世間を探すという能動的な関係再構築と、単に世間に合わせ

ていくという受動的な関係再構築、並びにその世間を準拠集団とみなすことを辞めて放置するという方法があるといえる。

世間との関係再構築過程における「私」から世間への影響

本研究の結果から、世間との整合、不整合が代弁者である他者によって伝達されたときには、その世間の一員であってもなくても、自分の考えをその他者の背後の世間に対して主張することで世間への適応を高めようとする、そして同時に自分の考えにも修正を加えるが、自分の考えを変えると世間への適応が低下する可能性が示唆された。また整合事態では、世間に自分の考えを主張することで自尊感情を高めるだけでなく、同時に他の世間を探すこともみられた。「私」は、世間と一致したことだけでは満足せずに、自らの言動を世間に発信し自分が世間を形成していく行動を発現させるのだと考えられる。一方、不整合事態においては、「私」は世間に自らの言動を主張し自分を支持してくれる別の世間を探す行動を発現させる一方で、世間に同調することで適応を図ることが示唆された。また、その世間を準拠集団と見なすことを辞めて、自分の考えを変えずに自尊感情を保つこともみられた。「私」は、世間との不一致に対して、ただ世間に同調を図るばかりではなく、複数の世間を使い分けようとしたり世間と自分を切り離したりして、能動的に世間との関係を再構築していくのだと考えられる。大坊(2006)は、自分の行動の基盤となる規範を生み出す世間や社会についてのイメージを持たず、自分勝手に描いた自分の世間の中でしか生きていない状態を、社会性を持ち合わせていないという点で「無社会性」と呼んでいる。不整合事態での脱準拠や放置には、世間を、準拠する必要がないものとみなす無社会性に近い要素も含まれているかもしれない。

これまで個人にとっての世間は準拠集団としての機能を果たしていることが指摘されてきた(井

上, 2007)が、本研究の結果から、個人は単に世間の規範に従い世間からの影響を受けるばかりの存在ではないことが示唆される。世間との一致、不一致の情報に対して、状況に応じて、自己の世間化といえるような自ら積極的に世間に働きかけて、世間を構成しようとしたり、逆に世間との関係を切り離し自分とより一致する居心地のよい世間に準拠先を切り替えたりする、主体的な存在だといえる。

今後の課題

1点目として、世間の代弁性認知がどのように行われているかが不明な点があげられる。本研究では世間代弁性認知の得点の中央値に基づき、整合・不整合の相手の背後に世間を認知した対象者のみを分析対象としたが、世間代弁性認知の平均値は3.72と決して高くはなかった。他者からの支持や批判の背後に世間の基準を感じ取っている場合もあればそうでない場合もあり、全体としてそれほど強く世間を感じ取っていないことが窺える。世間と「私」との関係を検討するにあたって、整合事態や不整合事態が、特定の相手との二者関係の中での経験なのか、その相手が世間の基準との一致・不一致を伝達する代弁者の役割を果たしていると認知できる経験なのかを明別する方法を今後検討する必要がある。

2点目として、モデルの妥当性をさらに高める必要がある点が挙げられる。本研究では、事態の評価、世間との関係調整、世間との関係再構築という3段階を想定し、概ね十分な適合度を得ることが出来たが、第1段階から第3段階への直接の影響関係や同じ段階内での影響関係もみられた。また本研究では検討に及ばなかったが、再構築された世間との関係に基づいて、再度、事態の評価や関係調整が行われるといった循環的な過程も想定できるかもしれない。今後、本研究のモデルを基に、整合事態と不整合事態における「私」の世間に対する反応過程をよりの確に捉えたモデルを探索していく必要がある。

引用文献

- 阿部謹也 (1995). 「世間」とは何か 講談社現代新書
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure upon modification and distortion of judgement. In H. Guetzkow (Ed.) *Groups, leadership, and men*. Pittsburgh: Carnegy Press.
- Asch, S. E. (1956). Studies of independence and conformity.: A minority of one against a unanimous majority. *Psychological Monographs*, 70, 1-70.
- Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Byrne, D. & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Byrne, D., Nelson, D., & Reeves, K. (1966). Effects of consensual validation and invalidation on attraction as a function of verifiability. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2, 98-107.
- 大坊郁夫 (2006). コミュニケーションが築く高質の対人関係：社会性の維持・回復を目指すために対人社会心理学研究, 6, 1-6.
- 井上忠司 (2007). 「世間体」の構造 講談社学術文庫
- James, W. (1890). *The principles of psychology*. New York: Henry Holt
- 風間文明・下斗米淳・飛田操・角尾美奈 (2010). 世間に対する自己機能 (2) —自己の世間 適応機能の検討— 日本社会心理学会第51会大会発表論文集, 372-373.
- Leary, M. R. & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M.P.Zanna (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol.32. San Diego: Academic Press. pp.1-62.
- Merton, R. K. (1957). *Social theory and social structure: Toward the codification of theory and research*. The Free Press, U.S.A. (森東悟・森好夫・金沢実・中島竜太郎 (共訳) (1961). 社会理論と社会構造 みすず書房)
- 三隅讓二・木下富雄 (1992). 「世間は狭い」か?— 日本社会の目に見えない人間関係ネットワークを推定する— 社会心理学研究, 7, 8-18.
- 中村陽吉 (1990). 自己過程の社会心理学 東京大学出版会
- 中村陽吉 (2011). 世間心理学ことはじめ 東京大学出版会
- 朴賢昌 (2009). 仲間集団への同調とストレスの関係 (1): 学校適応感を中心に日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 427
- 坂元昂 (1965). ピアジェの学習心理学 波多野完治 (編著) ピアジェの発達心理学 国土社 pp.195-227.
- Schutz, W.C. (1958). *FIRO: A three-dimensional theory of interpersonal behavior*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Shimotomai, A., Tsunoo, M., Kazama, F., & Hida, M. (2017). Self-Function and Occurrence of Social Anxiety as an Adaptational Warning: Empirical Understanding of "Seken" *Bulletin of Senshu University School of Human Sciences: Psychology*, 7, 1-14.
- 角尾美奈・飛田操・下斗米淳・風間文明 (2010). 世間に対する自己機能 (3) —自他の整合・不整合事態における世間伝播機能の検討— 日本社会心理学会第52会大会発表論文集, 139.

註

- 1) 整合事態、不整合事態の重要性 (7件法) の平均値は、整合条件は $M = 5.77$ ($SD = 1.20$)、不整合条件は $M = 4.60$ ($SD = 1.83$) と、いずれも7件法の midpoint (4) を上回っていたことから、概ね重要な事態が想起されていたといえる。また条件間に有意な差がみられ ($t(245.4) = 6.40$, $p < .001$)、整合条件の方が不整合条件よりも、

より重要な事態が想起されていた。

付記

- 1) 本研究は日本社会心理学会第52回大会で発表したデータを再分析したものである。